

ニュージーランド・マオリのタトゥー、モコを彫る人々

その小さな部屋に入ったとたん、インクと血が混ざったような、独特の匂いが私を包んだ。

「帰ってきたんだ」。そう思った自分自身に少し戸惑いながらも、私は、懐かしさと安堵で胸がいっぱいになるのを感じていた。

留学していたニュージーランドの大学が長い休みに入ったためだった。それまで授業と課題の山に追われて日々を過ごしていた私は、3時間バスに揺られ、久しぶりに知り合いの彫師を訪ねていた。留学開始から3カ月、知り合いの彫師に会うこともほとんどかなわず、都会での学生生活に追われていた。そんな中、久しぶりに触れた「タトゥーの匂い」に、私は安堵し、興奮していたのだ。

「私ね、今気付いたんだけど、この匂いが恋しかったみたい」、そう言うと、彫師は「そうか」と笑い、「Reikoが『タトゥーの匂いが恋しかった』ってさ」と仲間に話して笑っていた。タトゥーに関してずぶの素人だった私が、タトゥーを研究することになり、今、タトゥーの匂いに触れて安らぎすら感じている。たしかに、ちょっと可笑しかった。

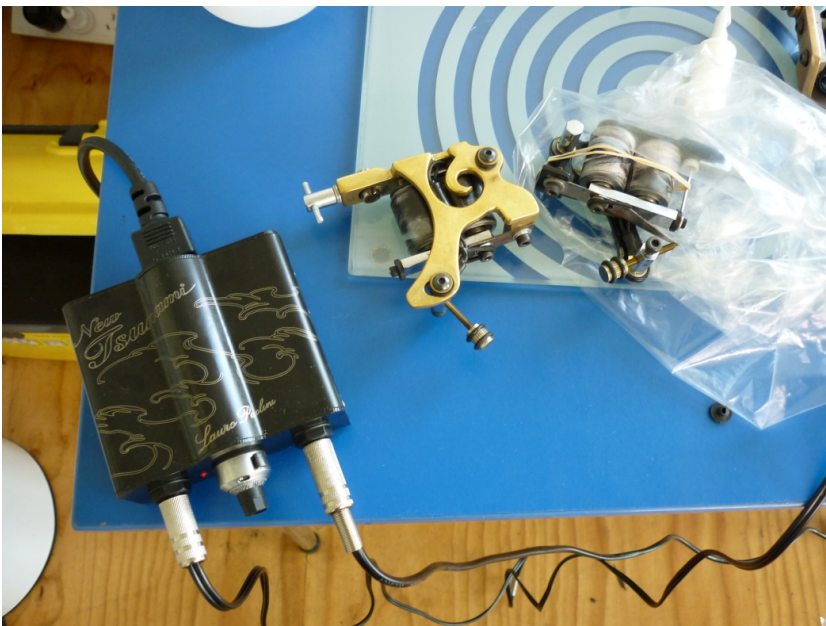


写真1 タトゥー・ガン（現在使われているタトゥーを入れる道具）（2010年2月撮影）

私が調査を行うニュージーランドは、先住民の権利・文化復興運動の激しさで知られている。18・19世紀のヨーロッパ人の到来と入植に伴う文化接触と植民地化により、先住民であるマオリの人々の生活は激変、民族としての存続を危ぶまれるほどになった。しかし、マオリの人々による力強い運動の中、20世紀後半からマオリ語やマオリ芸術、儀式などが復興されている。

私の研究テーマである、マオリのタトゥー（モコ）も、一度失われ、復興された風習である。20世紀の半ばに施術が行われなくなったのだ。そのモコが再び行われるようになったのは、1990年ご

ろからのことと言われている。現在では、伝統的な施術部位である顔や太股にもモコを入れる人々も、徐々に増えている。

ニュージーランドでフィールドワークを始めた私を迎え、話をしてくれた彫師たちは、このモコの大きな変化の時代を生き、タトゥーを彫ってきた人々だった。

様々な都市に住む彫師を訪ねる毎日。訪ねている彫師がタトゥーをする時には、それを見せてもらうことができた。タトゥーは数時間、長い時には6時間以上にわたって行われる。私は、時にはタトゥーのスケッチをしたり、記録を取ったりしながら、横に座ってタトゥーが彫られていくのを眺めているのが好きだった。仕事をする彫師たちを見るのは幸せだったし、なによりその過程を彫師やタトゥーを入れる人々とともに過ごすのが心地よかったのだ。

真剣な目で、手際良くデザインを描き、マシンでなぞっていく彫師たち。目線に、ペン先に、マシンの針の先に、エネルギーがこもっている。いったい、どこからそんな発想が生まれてくるのか。どこからそんなに美しいデザインが生まれてくるのか。いつもと何も変わらないのだけれど、こういう時の彫師たちは、ただただカッコいい。



写真2 タトゥーを入れる彫師（Tane 2010年7月撮影）

インクと、血と、消毒液が混ざったような匂いが部屋全体に立ちこめ、肌に傷をつけインクを入れるタトゥー・ガンの「ジー」という音、スピーカーから流れる音楽が、ゆったりとした空間を作り出す。音楽がまったくない場合もあるが、彫師たちは音楽をかけながら彫るのを好む。「ジー」となり続けるマシンの音がまぎれて、集中できるのだと言う。たいてい、かかっているのはレゲエ。

レゲエは、その独特のリズムがタトゥーを彫る時の痛みを癒してくれるような気がする、と私は思っていた。実際には、見ている私は痛くないのだけれど、目の前で痛そうにしている人を見るのは、いてもたってもいられないような感覚である。「どうすれば痛くなくなるだろう」と右往左往し、「もうここまでできたよ、もう少しだね」と彫りかけのタトゥーの写真を見せてみたりもするのだ

けれど、タトゥーを入れているその人は、陽気に私や彫師と話しつつ、時にはやっぱり痛みに顔をゆがめるのだった。涙を浮かべることも、ただつつぷして耐えていることもあった。そんな時には、その人に触れたい、体をさすってあげたいという気持ちにとらわれたものだ。たいてい、出会ったばかりのその人に触れることはできなかったのだけれど。



写真3 赤いインクを使ってタトゥーを入れる彫師（Grayza 2011年11月撮影）

20世紀半ばの断絶以降、モコは、今のように「美しいマオリ文化」として認められていたわけではなかった。タトゥーをするのは、薬物やお酒におぼれ、けんかをするギャングたち、顔にタトゥーを入れるなんて倒錯だ、タトゥーは醜く、悪いものだと思われていた。モコが社会的に受け入れられるもの、美しいマオリ芸術と評価されるようになったのは、おそらく1990年代終わりから2000年代、つい最近のことだったのだ。それでもなぜ、人々は自身の体に、顔に、モコを入れようと決意したのだろうか。

「怖くなかったの？」 顔にモコをもつ彫師に、私は聞いたことがある。

「怖かったさ、嘘は言わない」と、その彫師は答えた。彼がモコを入れようと決意したのは、長女の誕生を迎えてのことだった。

「でも、生まれてくる子には、俺の『本当の顔』を見せたいと思ったんだ。モコを入れていない顔ではなく、『本当の顔』を」

モコを入れることで、彼は、「本当の顔」を手に入れることができる、という。彼にとっては、モコを入れていない「そのままの顔」は、「本当の顔」ではなかったのだ。





写真4 片面にモコを入れた彫刻（Waitakereにて2011年11月撮影）

フィールドワーク。私にとって、それは、少しずつモコのこと、マオリのこと、そして何より目の前にいるその人のことを知っていく過程だった。語り、食事をし、お酒を飲み、そしてタトゥーを刻む時間を共にする中で、私自身が、少しずつその世界に染まっていく。最初は意味もわからず、バラバラだった断片が、一つずつつなぎ合わされ、焦点を結んでいく。

しかし同時に、それは、わからないことが無限に増えていく過程でもある。「なぜ、あの時あの人はああ言ったのか」。この無限に増え続ける疑問が解消されることは、一生ないのかもしれない。



写真5 ニュージーランドの風景（2010年11月）